

史跡横須賀城跡 V

昭和63年度保存修理事業概報

1989

大須賀町教育委員会

史跡横須賀城跡 V

昭和63年度保存修理事業概報

1989

大須賀町教育委員会

序

歴史と緑の町大須賀町の誇りである横須賀城跡は、その歴史的価値、重要性が認められて、廃城後百余年を経た昭和56年に国の史跡に指定されました。それ以来城跡保存整備のための発掘調査及び修理、整備が行われてきました。

昭和63年度は特に北の丸、本丸の発掘と西の丸周辺の整備が行われ、また、外堀跡の買収も完了いたしました。これらの事業推進につきましては、文化庁、県教委文化課の先生方、斎藤 忠（大正大学名誉教授）・小和田哲男（静岡大学教授）・高瀬要一（奈良国立文化財研究所）各先生のご指導のもとに、また、大勢の作業員の方々のご協力により、所期の目的を達成し、本年度の調査のまとめ「史跡横須賀城跡Ⅴ」を発行する運びとなりました。関係のみな様方に心からお礼を申し上げます。

平成元年度は、これらの成果に基づく整備事業、及び天守台付近の調査、石垣遺構の調査整備等を予定しており、みな様方の更に一層のご指導ご協力をお願いする次第であります。

また、本調査が横須賀城跡の貴重な資料であるばかりでなく、広く郷土の研究に活用されますよう希望いたします。

平成元年3月

静岡県小笠郡大須賀町教育委員会
教育長 金原與四郎

例 言

1. 本書は静岡県小笠郡大須賀町に所在する史跡横須賀城跡の昭和63年度保存修理事業の概報である。
2. 保存修理事業は文化庁・静岡県の補助、指導を受けて、大須賀町教育委員会が実施した。
3. 保存修理事業に伴う発掘調査は、斎藤忠（大正大学名誉教授）・小和田哲男（静岡大学教授）高瀬要一（奈良国立文化財研究所）の指導のもと、大須賀町教育委員会の木佐森道弘が担当し調査に関する事務は大須賀町教育委員会事務局があたった。
4. 本書の執筆分担は下記のとおりである。
第1章・第2章 木佐森道弘 第3章 斎藤 忠
5. 本書の編集は木佐森がおこなった。
6. 発掘調査に係わる資料は大須賀町教育委員会が保管している。
7. 調査ならびに本書の執筆にあたり下記の方々のご協力、ご指導を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
仲野泰裕、水島和弘、松井一明、前田正一、島田冬史
8. 発掘調査参加者
作業員 大石猪太郎、藤田長吉、服部惣一郎、戸塚正一、戸塚重一、藤山喜代志
岡田賢一、金丸久子、佐々木はるみ、加藤さぬ枝、粕谷一江、鈴木あや子
鈴木はつえ、竹内ふく
整理員 佐野いと、堀江つね、鈴木いち

本文目次

第1章	昭和63年度の事業概要	1
	第1節 土地の公有化事業	1
	第2節 発掘調査事業	1
	第3節 復原環境整備	1
	第4節 保存管理事業	1
	第5節 整備委員会及び保存に係わる会議等	2
	第6節 現状変更の一覧及び固定資産税の減免	2
第2章	発掘調査の概要	3
	第1節 調査に至る経緯経過	3
	第2節 調査の方法	4
	第3節 遺構について	4
	第4節 遺物について	14
第3章	ま と め	18

挿図目次

第1図	横須賀城跡位置図	2
第2図	発掘調査区域図	5
第3図	SK-01 遺物出土状態平面図および土層図	7
第4図	北の丸石列状遺構平面図	9
第5図	北の丸西側斜面溝状遺構平面図	11
第6図	北の丸下層石列状遺構平面	13
第7図	出土瓦実則図(1)	15
第8図	出土瓦実則図(2)	16

図版目次

- 図版 1 調査前風景（南より） 調査終了時全景（南より）
- 図版 2 SX-1 検出状態（西より） SX-1 検出状態（東より）
SX-4 SX-5 検出状況（南より）
- 図版 3 SX-6～SX-8 検出状況（西より） SX-11 検出状況（南西より）
- 図版 4 SX-9 SX-10 検出状況（北より） SX-12 上面検出状況（北より）
SX-12 上面全景（西より）
- 図版 5 SX-12 下面全景（西より） SX-14 検出状況（北より）
SA-1 検出状況（西より）
- 図版 6 P-1 断面（東より） P-2 検出状況（西より） P-2 検出状況（北より）
- 図版 7 P-3 検出状況（東より） P-3 内礎石検出状況（南より）
P-3 検出状況（北より）
- 図版 8 P-5 上面検出状況（西より） P-5 下面検出状況（南より）
P-5 下面検出状況（西より）
- 図版 9 出土遺物 1

第1章 昭和63年度の事業概要

第1節 土地の公有化事業

城の公有化事業も7年目を迎え、また西大手門周辺の公有化事業についても3年目を迎えた。したがってこの部分の公有化事業についての見直しが必要となってきた。そこで63年度事業として、先行取得による土地の公有化事業を実施した。

昭和63年度買上地

事業費	181,857 千円
買上面積	3,181.08㎡
筆数	13筆
地主数	10名
補償費	90,059 千円

第2節 発掘調査事業

昭和63年度の発掘調査は国・県の補助を得て、本丸の平坦面とその西側の平坦面および南側斜面ならびに北の丸の平坦面とその西側斜面について実施した。

本丸および北の丸の平坦面については、御殿跡、倉庫跡等の建物跡の検出を、本丸の南斜面については石垣、登り口および門跡の検出を目標とした。

第3節 復原環境整備

昭和63年度は国県の補助を得て前年度に調査の終了した西の丸について、復原環境整備を実施した。

平坦面については全体に芝張りを実施した。発掘調査で根石群を検出した部分については建物跡を想定して周囲より30cm程度盛土をし、根石の直上には礎石をイメージして偏平な丸礎を据えた。また、周囲についてはサザンカを植栽して塀を示した。西側斜面では石段状の遺構を検出しているため、偏平な丸礎を利用して遺構に忠実な形での復原環境整備をおこなった。

その他、史跡公園の施設整備の一貫として駐車場の北西隅にトイレを設置した。

第4節 保存管理事業

- 業者委託により既公有化地の内公園整備の済んでいる部分について園地年間管理を行った。
内容 …… 肥培管理・病害虫防除・整枝作業・芝生年間管理等
- 業者委託により未整備地の伏開草刈工事を年3回おこなった。
- 公園の除草については教育委員会で直営で行った。
- 梅園の病害虫防除等の管理については、大須賀町郷土研究会が行った。

第5節 整備委員会及び保存に係わる会議等

整備委員会と整備推進合同委員会を行い調査、復元環境整備等について協議検討を行った会議の日程は下記のとおりである。

昭和63年10月22日 城跡整備委員会

平成元年2月28日 整備推進合同委員会

その他、本年度は城跡関係資料調査として千葉県鴨川市・同県君津市・国立資料館等へ調査に行った。

第6節 現状変更の一覧及び固定資産税の減免

昭和63年度の史跡の現状変更の申請は下記のとおりである。

申請件数 6件

内容	住宅新築	1
	工場棟増築	1
	施設整備等	2
	水道管敷設等	2

固定資産税の減免

昭和63年度の固定資産税の減免の申請者は52名で還付金額は744千円である。



第1図 横須賀城跡位置図

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯経過

1. 調査に至る経緯

調査は公有化地の復原整備の一貫として、昭和59年より継続して行っていて本年度5年目を迎えた。

調査箇所については整備委員等の指導を受け、本丸の平坦面およびその南斜面並びに、北の丸の平坦面およびその西側斜面に決定し、昭和63年10月19日から、平成元年3月25日までの5ヶ月間おこなった。体制は以下のとおりである。

調査主体 大須賀町教育委員会

調査指導 斎藤 忠(大正大学名誉教授)

小和田 哲 男(静岡大学教授)

高瀬 要 一(奈良国立文化財研究所)

調査事務 大須賀町教育委員会

2. 調査の経過

今年度の調査は前半においては比較的順調に進行したが、後半になり雨天等に災いされた。

調査日誌抄

昭和63年10月19日 杭打ち、発掘区設定

〃 10月24日 本丸平坦面東南隅より掘始める。

〃 11月24日 北の丸部分杭打ち作業

〃 11月28日 SX-01検出

〃 11月29日 北の丸ヘトレンチを設定し掘り始める。

〃 12月2日 SX-01遺構掘り

〃 12月5日 北の丸D-5区にて礎石建物跡を検出する。

〃 12月12日 北の丸D-7区で瓦溜まりを検出する。

〃 12月15日 北の丸D-7区で石列状遺構を検出

平成元年1月26日 本丸平坦面実測

〃 2月6日 本丸平坦面埋め戻し開始、SK-01検出

〃 2月9日 SK-01実測、写真撮影

〃 2月28日 整備・推進合同委員会、午前中現場で委員より指導を受ける。

〃 3月8日 北の丸西側斜面にて溝状遺構を検出

〃 3月9日 北の丸整地層下から石列状遺構を検出した。

〃 3月25日 資材等片づけ発掘調査終了する。

第2節 調査の方法

横須賀城跡で継続して実施している発掘調査の基準杭については、昭和59年度に設置した基準点を基に、国土座標に合わせ設置している。

本丸、北の丸それぞれの中央部に東西方向、南北方向にトレンチを設定して、遺構の残存状況を把握してから全面を削いでいく方法をとった。また、本丸南斜面、北の丸西側斜面についてはサブトレンチをいれて遺構の残存状態を探った。整地層についてはトレンチに沿ってさらに掘り下げ土層観察をおこなった。整地層の下層で検出した遺構については部分的に拡張してその性格等について調査した。

第3節 遺構について

本丸、北の丸の平坦面については永年にわたり耕作されていたため、遺構の残存状態は悪かった。しかし、本丸については土坑を3か所検出した。また、その本丸の南斜面において石垣を検出した。北の丸については礎石の根石をはじめ、瓦溜まり、溝状排水状遺構、石列状遺構2か所など多数の遺構を検出する事ができた。

1. 本丸平坦面

絵図によればこの部分には本丸御殿と思われる建物と門跡が描かれている。そこで礎石もしくは礎石の根石等の遺構を検出することを目標として、調査を進めたが残念ながらそれらの遺構は検出できなかった。平坦部分の構造、特に裾部分については大規模な整地層によって構築されている事が確認できた。

天守台の西側 D-10 区において、いくつかの遺構を検出した。これらを順に述べる。

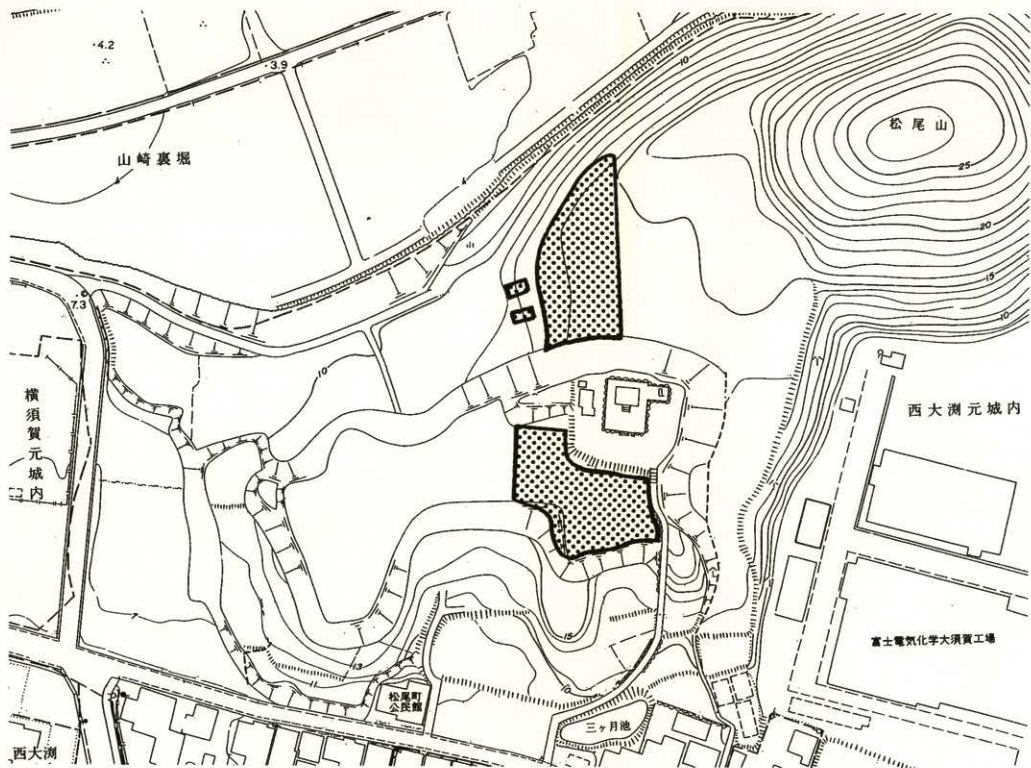
SK-01

天守台の下場部分に隣接している長軸の長さ100 cm、短軸50cm、深さ30cmを測る長方形の土坑である。この土坑からは中央部西側下場部分で完形のカワラケ3点が重なって出土している。出土状態は下の二つが口縁を下にした状態で重なって出土し、一つがこれらの上に上向きに乗る状態で出土している。また、図示したとおりカワラケの出土した部分の掘方が熱を受けたと考えられ赤く変色している。したがってこの部分で火を燃した事はあきらかであり、カワラケの出土とあわせて考え何らかの祭祀的な行事が行われた土坑と考えられる。

土師質土器の編年については遺構に伴う出土例が乏しいため、カワラケの時期の特定は難しいところであるが、乏しい類型等から判断して明治時代以前の近世の遺物と考えたい。したがって遺構の時期についても城の存在していた時代の遺構と考えられる。その場合、城内の建物等の地鎮に関係した遺構とも考えられるがカワラケの時期の特定ともども不明である。

SX-01

D-10区の北西隅に位置する長軸の長さ3.5m、短軸の長さ1m、深さ1mを測る南北に細長い長方形の遺構であり、溝を途中で断ち切ったような形状をしている。遺構は固く締まった小笠山の礫層を深く掘り込んで造られている。出土遺物は瀬戸美濃製の天目茶碗・瀬戸美濃製の鉢・産地不明



第2図 発掘調査区域図

の握り鉢・鉄軸の茶碗・中国明代の磁器片等の遺物が出土している。磁器については中国明朝時代、国産の陶器類についてはいずれも17世紀中葉と考えられる。ただし鉄軸の茶碗については少なくとも18世紀の初頭以降の遺物と考えられている。その他軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦等の瓦類、小型の一石五輪塔の基部と考えられる石製品が出土している。瓦の時期については椽瓦が含まれ無い事、北の丸の下層から出土した古い時期の瓦と考えられる瓦と同じものが出土している事から横須賀城の古い時期の瓦と考えられる。

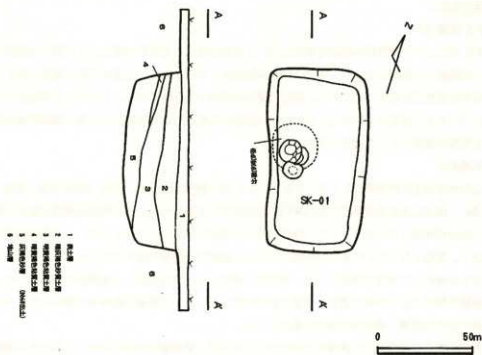
遺構の性格についてはその形状などから城内の便所の溜の可能性も考えられるが、今後の検討をようするのでここでは不明土坑とした。

SX-02

SX-01 に隣接する直径100 cm深さ75cmのはぼ円形の遺構である。遺物は出土しなかった。形態からすれば座館の土壌墓と考えたいところであるが近世の遺構と考えた場合、城内に墓があったとは考え難い事から不明土坑としたが、隣接する部分にある SX-01の形態等から考えた場合当時の便所の溜の可能性も考えられる。

2. 本丸南側斜面

この部分については全面的に表土を排除し遺構の残存状態を観察したが、何らの遺構も検出、出来なかった。そこで再度2ヶ所にトレンチを設定し、遺構を探ったところその両方で石垣の根石と考えられる石列を検出した。石垣の現状での現存部分は3段である。石は小笠山礫層中のみ



第3図 SK-01 遺物出土状態平面図および土層図

られる長径30～50cm程度の丸礫が使われている。第00図の土層図で示したとおり石垣の上面は瓦と砂利層に覆われ、さらにその上に赤褐色の砂利層が厚く堆積している。その厚さは現状の表面から150 cmの厚さがある。これらから考えてある時期に大規模な改変が行われ、平坦面が造成された事が推測出来る。しかしその時期については判然としない、ただ石の直上から西尾氏の家紋である榊松紋入りの軒丸瓦が出土しており、西尾氏の入封した天和(1682)以後である事だけは確実である。

この石垣については今回、トレンチによって断片的に検出しただけであるが、整備委員会の指導により次年度(平成元年土)全面的に発掘して、その全容を解明する計画である。全容調査により石垣のみならず登り口、門跡等の遺構も検出出来る可能性があり次年度の調査結果が期待される。

3. 北の丸の平坦面

この部分は本丸の平坦面と同じく払い下げ以来永年にわたり耕作されていたため、はっきりした建物群は検出できなかった。絵図によればこの部分には幾棟かの建物が描かれており、倉庫的な建物群が想定させている。

集石遺構-01・02

B-6 区において礎石の地固めの石と考えられる集石遺構を検出した。その位置は最初に設定したトレンチ内であり集石遺構がどのように配列されているか、今回の調査では面的に捉えることは出来なかった。しかし、今後の調査により建物跡として、捉える事の出来る集石遺構となる可能性がある。

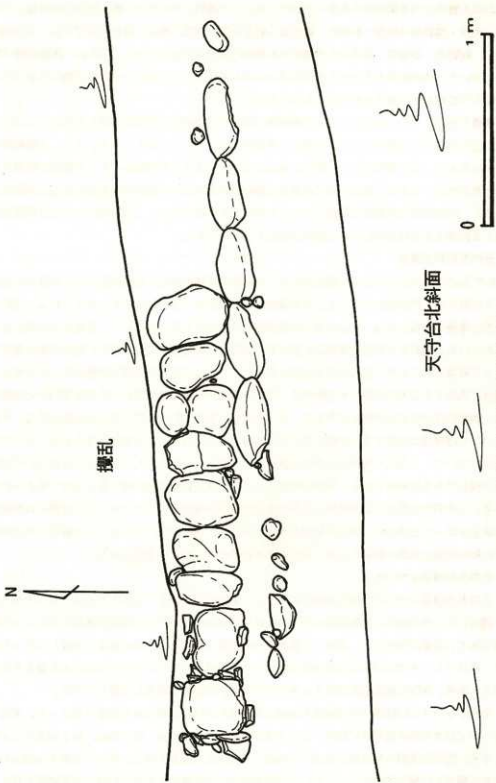
D-5 区SB-01

D-5 区において建物跡の礎石を検出した。この部分は北の丸を取り囲むように廻る土塁状の高まりの屈曲した部分にあたり、周りに比べ1m程度高くなっている。上面は平坦で礎石と考えられる偏平な自然石が据えられている。礎石と礎石の間隔は2m程度である。したがって想定される建物についても小規模なものが考えられる。位置等から推定して北の丸および城の裏堀方面を監視する見張り番所のような建物が考えられる。

瓦溜まり

北の丸平坦面の西側部分D-5 区、D-6 区、D-7 区の範囲において、長径(南北)20m、短径(東西)8m、深さ1.3mを測る南北に長い楕円形の瓦溜まりを検出した。この部分は調査以前から東側より50cm程度低くなっており、また、西側部分は土塁状に高くなっているため、この部分は相対的に低く、窪地となっていて黒土が堆積していた。絵図では建物が描かれている。表土を剥ぎ、瓦溜まりを検出した時点で東西に2本、南北に1本のトレンチを設定し土層観察をおこなった。その結果予想以上に大規模で遺物も豊富な事が判明した。そこで調査日数等を考慮に入れ、今回の調査ではその規模、構造等の解明を重点とした。

その結果この瓦溜まりは最深部で120 cm以上に及び、堆積層は中心に向かって緩やかに傾斜していて堆積層は均一では無い。全体には黒土層の割合が大きい箇所々に雑瓦層を挟んでいる。



天守台北斜面

第4図 北の丸石列状遺構平面図

なお黒土層中には多量の炭片を含んでいた。出土した遺物については、碗・皿等の磁器類、灯明皿・徳利・摺鉢等の陶器・軒杖瓦・軒丸瓦・鯉瓦片等の瓦類、礎石と思われる切り石、その他鉄製品、銅製品、焼塩壺、貝等の自然遺物等多種類の遺物が出土している。この内、陶磁器類の時期については18世紀中のものが主で19世紀のものもみられる。。瓦については三輪〇〇空〇〇と瓦職人の名前がへら書きされているものがある。

遺構の時期については出土している陶磁器の年代が18世紀から19世紀と考えられる。したがって18世紀の末から19世紀にかけての時期に廃棄が始まったものと考えられる。また、土層観察状態から考えて、瓦の廃棄のために新たに掘られたと考えるよりも以前からあった窪地に投棄されたと考えたい。しかし、絵図ではこの部分に建物が描かれている事等を考え合わせると不明な点も多く、明治初年の廃城時に廃棄されたとの考えもすてきれない。この部分については今後再調査する計画もあり時期等について解明出来るかと考えられる。

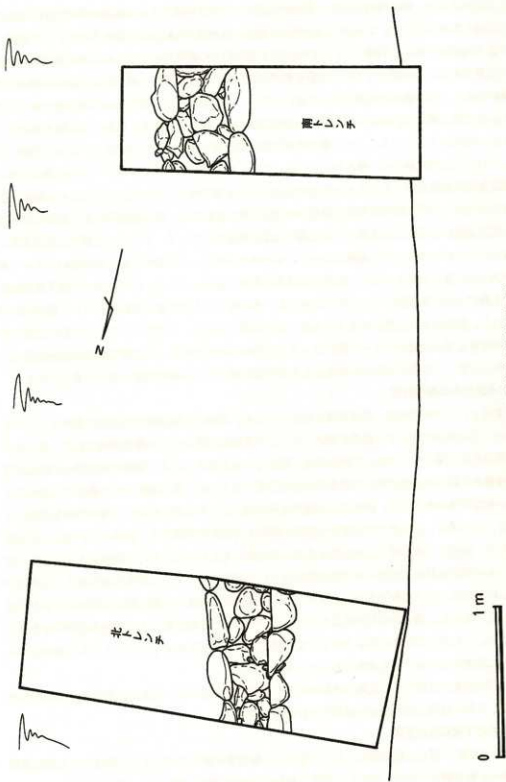
北の丸石列状遺構

D-7 区の南端部分天守台の山裾に沿って、石列状の遺構を検出した。絵図ではこの部分に西側からの登り口と門が描かれている。この遺構は門の敷石の一部ではないかと考えられる。石組は小笠山礫層中の長さ30cm～40cmの偏平な砂岩礫を平に据えて造られていて、目地には小礫が詰められている。現存する部分は東西に2.5mであり石列の上面はほぼ水平である。石の北側は攪乱によって破壊されており、石列は検出出来なかった。しかしこの石列の西に門跡があったと考えた場合、残存する石列の北側にも石敷があって門の内側の石畳を造っていたのではないかと推測する。西側の部分は石の状態から考えて、もう少し西へ延びていたのではないと思われる。東側については東端に位置する石が周りの石より10cm程度高くなっている事から考えると、ここで区画されていて、これより東側には石列は無かったのではないかと考えたい。この石については門跡の礎石である可能性もある。石列の南縁には縁石状に偏平な石が横に長く立てて据えられている。この石列は長さ2.5mで偏平な石列の東側部分で1m程度重なっている。この位置から西側にも縁石があったと思われる、縁石の目地石と思われる石が1m程度続いている。この縁石の列は南側の山裾の斜面と北側の敷石(石畳)を区画する目的で造られたと考えられる。

北の丸の構造について

北の丸の構造については南北方向はFライン、東西方向は6ラインにそれぞれトレンチを入れて調査した。その結果、土塁状部分と北の丸の平坦部分については大規模な埋め立てによって構築されている事が判明した。最初、土塁状部分を立割った段階では地山層まで到達しなかったので、南北トレンチではF3区の土塁状部分について、東西トレンチについてはD6区の瓦溜まり部分の2ヶ所と、B6区の西側斜面の計4ヶ所について人力で掘る限界まで掘り下げた。

南北トレンチのF3区部分では地表下2m60cmまで掘り下げたが地山まで到達しなかった。東西トレンチでは3ヶ所を掘り下げたが、ここではこれを仮に第1地点、第2地点、第3地点とよぶ事とする。E6区から西へ4mの第1地点では地表下2m20cmまで掘り下げた。そして地表下1m60cmの所で地山層らしい層に到達した。ただしこの地山については礫が含まれていない点等疑問も残る。



第5図 北の丸西側斜面溝状遺構平面図

E 6 区から 7m、第 1 地点から西へ 2m の地点については地表下 2m10cm 掘り下げたが、地山には到達しなかった。E-6 から西へ 13m の第 3 地点では地表下 3m80cm ほど掘り下げた。その結果、地表下 3m80cm で地山に到達した。この地点は土塁状部分の最高地点からみれば実に地表下 4m60cm の位置である。この部分で下から土層を簡単に説明する。地山層の上層に厚さ 16cm の灰褐色の砂層が乗る。この砂層は地山層とあまり変わらない。この上層には、厚さ 50cm の黒土層が乗っており、この黒土層の上面付近が城以前の旧表面ではなかったかと考える。なお、この黒土層中より 2 片の瓦が出土している。この上層の暗黄灰色粘質土層は赤土と黒土の厚さ 3～4cm の互層になっており人工的に築かれた層と考えられる。ただし突き固められてはいない。この土層の上層は暗灰茶褐色粘質土層であり赤土と黒土が混合している層で締まっていない。またこの土層の上面は水平となっていて北の丸西側下段部分を造る土層と思われる。第 3 掘削穴のすぐ西側に溝状排水施設遺構があるがこの遺構もこの土層の上面に構築されている。またこの土層の上面は東側に緩やかに上がって北の丸の基盤になっていると考えられる。この層の上層に黄褐色の小ジャリ層が 1m50cm の厚さで乗っており、斜面と土塁状の高まりを造っている。あるいはこの暗灰茶褐色粘質土層の上面が生活面となった時代があって、その後この上面に乗る黄褐色のジャリ層が付け加わり、斜面および土塁状の高まりを造ったとも考えられる。いずれにしてもこの層の上面で下層の粘質土層と上層の小ジャリ層とはっきり分かれるわけであり、この面で時代が区分出来るかは別として、この面が北の丸の構造上大きな区画を造っている事は間違いないと考えられる。

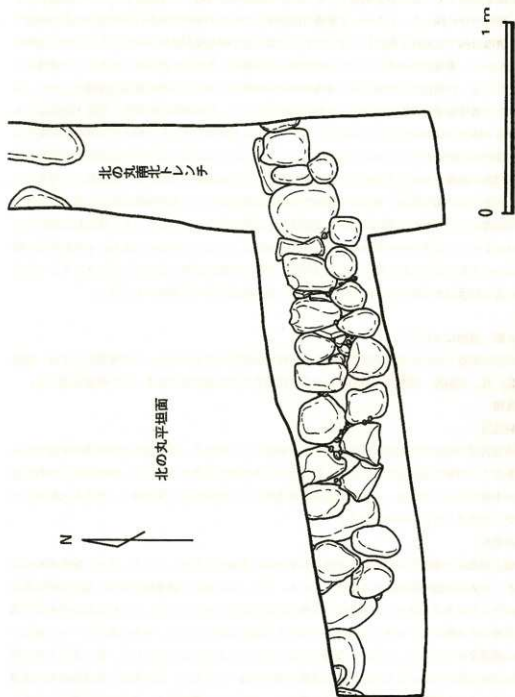
C-6区北の丸西側斜面

東西トレンチの掘削中、溝状遺構を検出したため、南側に 3.5m 程離れた位置に再度トレンチを入れ、この部分においても遺構を確認した。この遺構は石組みによる溝状遺構であり、北の丸の西側斜面の下場ラインに沿って南北に長く延びていると考えられる。遺構の幅は 60cm 石組は小笠山跡層中に覗かれる砂岩質の丸礫を巧みに使い造られている。溝の底部分には長径 20～30cm の丸礫を敷詰め造られている。縁部分には扁平な石を横に立て平な面を利用して溝の両縁を区画している。この溝は、北の丸の平坦面から西側へ傾斜する斜面の下場ラインに沿っていることから推察して、斜面から流れ落ちる水を排水するための溝と考えられる。また、絵図によるとこの下場ラインの南の延長線上付近に井戸跡が描かれている事から考えて、この溝の延長線上に井戸跡があるのではないかと推察できる。したがってこの溝は井戸の落水の排水用にも使われていたと思われる。ただし、溝の底は石が組まれているだけであって三和土等によって防水処理がなされていない。したがって実際の排水方法としては溝底を流下して排水するというよりも、溝の底から地下に浸透させて排水する遺構であったと考えたい。

今回の調査では断片的に遺構の状態が判明しただけであるので、今後この部分を全面的に発掘調査して井戸跡等も含め全容を解明する計画である。

北の丸下層石列状遺構

北の丸の D-7 区で土層観察用トレンチを入れ、整地層を掘り下げたところ前述した石列状遺構を乗せる整地層の下から、埋没した状態の新たな石列状遺構を検出した。遺構を検出したのは調



第6図 北の丸下層石列状遺構平面図

査も後半であって、しかも整地層下であったので期間等を考慮して今回はトレンチを拡張してその一部分だけを採った。したがって遺構の性格等について不明の点が多いが気付いた点のみ述べる。遺構は偏平な丸腰を利用して造られていて間には小礎瓦等が詰められている。ただし目地は隙間が多い。遺構の性格等については前述のとおり解明しきれない点が多々あるがこの遺構についても今後、再調査する計画であり遺構の性格等の解明については次回調査の課題としたい。なお、この遺構を乗せる整地層から多数の瓦が出土した。瓦の種類は軒平瓦・平瓦・軒丸瓦・丸瓦であり棧瓦及び軒棧瓦は一片も出土しなかった。また特異な瓦として軒平瓦の表面に尻尾のような帯状の突起帯が付いた瓦が2点出土しているこのような水返しのついた瓦は昭和60年度の東大手門跡の調査でやはり2点出土したのみである。その他特徴的な事としては家紋入りの瓦が1片も出土しない事である。今までの調査では城主の家紋の付いた瓦が多量に出土しており、今年度の調査についても他の部分については家紋付きの瓦が多量に出土している。特に軒丸瓦については必ずと言って言いほど家紋が付けられているがここでは三ツ巴のみである。また軒平瓦の紋様についても今までに例の無いあるいは非常に少ない特異な紋様の瓦ばかりである。そしてこれらの瓦の特徴は本丸跡のSX-01 についてもいえる共通点であって興味もたれる。

第4節 遺物について

今回の調査では北の丸の瓦溜まり等から多種類の遺物の出土をみた。その種類としては、陶磁器類、瓦、石製品、鉄製品、銅製品、その他貝類等の自然遺物等である。以下概略を述べる。

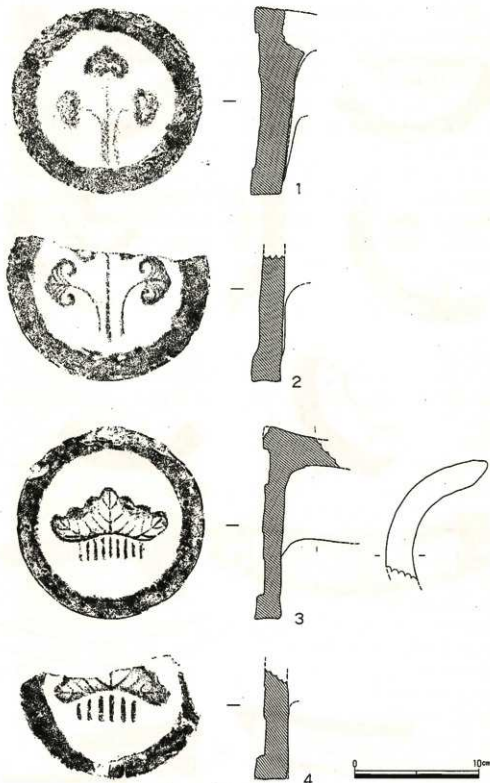
1. 瓦類

軒丸瓦

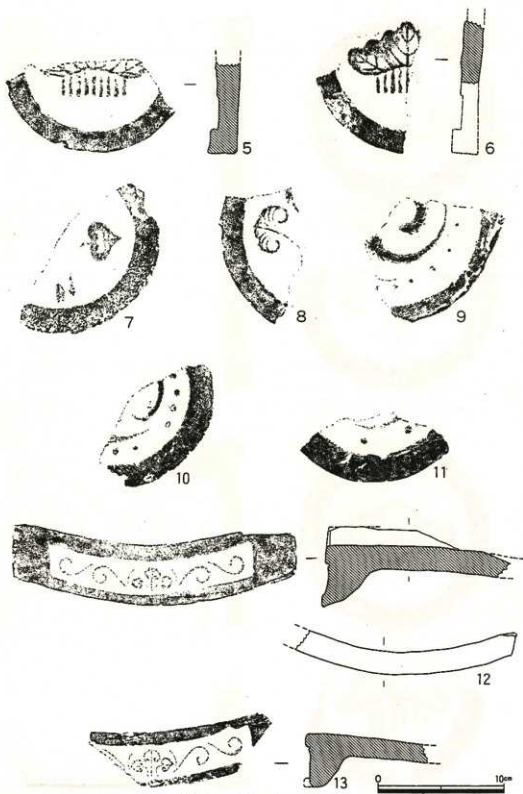
横須賀城の城主である西尾氏の家紋である櫛松文入り軒丸瓦、12代城主の本多氏の家紋である立葵文入りの軒丸瓦が出土している。特に北の丸平坦面の瓦溜まりからは、櫛松文入りの軒丸瓦が多量に出土している。また北の丸の下層遺物としては家紋入り瓦は無く、巴文入り軒丸かわらが1点出土しているのみである。

軒平瓦

城主西尾氏の家紋入りの軒平瓦が北の丸平坦面の瓦溜まりから出土している。また、城主本多氏の瓦が、本丸平坦面のSX-01 から出土している。また、北の丸の下層遺物とSX-01 出土の軒平瓦の中に今までにあまり出土した事のない文様の軒平瓦がふくまれている。とくに瓦当の中央に三葉の文様のある軒平瓦、中央に宝珠状の文様が入り唐草文がつくもの、中央に珠文が一つつき太い線の唐草文がつくもの、以上の3種類の瓦はいままであまり出土例がなく、特に本丸とその周辺には出土例がない。そして、前述の遺構の部分で述べたとおり、北の丸の下層遺物はその遺構の状況から古い時期の地層と考えられる事から、これらの一群の瓦も、古手の瓦と考えられる。この一連の古手の瓦のうち、中央に宝珠文を配し、脇に唐草文をつける軒平瓦と、中央に珠文を一つ付け太い線の唐草文をつける軒平瓦は、本丸平坦面のSX-01 からも出土している。



第7图 出土瓦类图(1)



第8图 出土瓦类测图(2)

軒棧瓦

北の丸の平坦面の瓦溜まりから特に、軒棧瓦が多く出土している。そのほとんどは、今までの調査でも多く出土している。鶯文様の瓦当文様をもち、丸瓦部に三つ巴文をつける瓦である。また、城主西尾氏の家紋である榊松文を中央につけた軒棧瓦もいくつか出土している。

その他の遺物

陶器磁器類

北の丸平坦面の瓦溜まりから、鉄軸をかけた陶器製の火鉢が出土している。この火鉢はその底部に墨書が残る。その他、肥前産の磁器と考えられる茶碗類が出土している。また、本丸の平坦面のSX-01からは17世紀のものと考えられる鉄軸をかけた瀬戸美濃産の天目茶碗、17世紀代の肥前系染付け磁器と考えられる皿、17世紀代の摺鉢等の横須賀城の古い磁器の遺物が出土している。しかし、一点、18世紀の初期と考えられる。鉄軸の丸茶碗が出土している。

土師質土器

本丸平坦面のSK-01 から3点のカワラケが出土している。時期については17世紀代と考えられる。また、北の丸の平坦面の瓦溜りから、土師質土器が出土している。

金属製品・石製品その他

北の丸の平坦面の瓦溜りから鉄製品、銅製品が出土している。鉄製品は釘類がほとんどである。本丸平坦面のSX-01 から一般に一石五輪塔と呼ばれる石塔が出土している。

第3章 ま と め

横須賀城跡の調査も5年目となり、本年度は郭の中心である本丸およびその周辺ならびに北の丸とその周辺について調査がおこなわれた。その結果今までの調査で得られる事の出来なかった数々の成果が得られた。

1. 本丸の南側斜面において石垣の根石を検出した。
2. 本丸の西側では3ヶ所の土坑を検出した特にSX-01 については、出土した土器等から18世紀初頭以前の遺構と特定できる。
3. 北の丸において門跡に関係すると思われる石列状遺構を検出した。
4. 北の丸において大規模な瓦溜まりを検出、多種類の遺物を得た。
5. 北の丸の北側において小規模な建物跡を検出した。
6. 北の丸の西側斜面下において今までに例の無い溝状の排水施設状遺構を検出した。
7. 北の丸の整地層の下より石列状遺構を検出した。
8. 北の丸の下層と本丸SX-01 において今までに例の無いあるいは極めて特異な一群の瓦を検出し、横須賀城の瓦の分類上大きな成果となった。

以上のように本年度の調査は例年にない数々の成果をおさめる事が出来た。ただ、残念なのは期間的制約や整地層下からの出土等の諸条件により、石垣・溝状遺構等について全容説明が果たせず次年度以降に委ねた事は甚だ残念である。

さて、次年度についてはいよいよ天守台の調査が始まり、又今年度検出の石垣の調査も本格的におこなわれる。その成果が期待されるところである。

圖 版



1. 調査前風景 (南より)



2. 調査終了時全景 (南より)



1. SX1検出状況（西より）



2. SX3検出状況（東より）



3. SX4、SX5検出状況（南より）



1. SX6-SX8検出状況（西より）



2. SX11検出状況（南西より）



1. SX9、SX10検出状況（北より）



2. SX12上面検出状況（北より）



3. SX12上面全景（西より）



1. SX12下面全景 (西より)



2. SX14検出状況 (北より)



3. SA1検出状況 (西より)



1. P-1断面（東より）



2. P-2検出状況（西より）



3. P-2検出状況（北より）



1. P-3検出状況（西より）



2. P-3内礎石検出状況（南より）



3. P-4検出状況（北より）



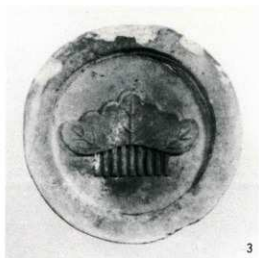
1. P-5上面検出状況（西より）



2. P-5下面検出状況（南より）



3. P-5下面検出状況（西より）



史跡横須賀城跡Ⅴ

昭和63年度保存整理事業概報

平成元年3月31日

編 集 行 大須賀町教育委員会

印刷所 株式会社 三 創
静岡市中村町166-1
電話(0542)82-4031(代)

